

月刊 中東レポート

第21号

ICO第5回サミットと、軍事緊張高める米帝－イスラエル

一九八七年二月一〇日

イラジ－イラク戦争は、一月一〇日からのイランの「カルバラ－五」

攻勢によって、新たな局面を迎えて

いる。イランの大攻勢と勝利的前進

は、サウジアラビア、クウェート、

U A E等アラブ反動諸国に大きな脅

威を与えることになった。また、こ

れらのガルフ産油国に権益をもつ米

帝をはじめとする帝国主義諸国にと

つての脅威ともなっている。米帝は、

こうした自己の権益を守るために、

クに戦略的脅威を与える攻勢をかけ

たのは初めてである。

二六日になると、イラン軍は、イ

結させ、この地域の緊張をさらに高めている。

一方、イラクも、優勢な空軍力を

動員し、イランの主要都市爆撃で反撃している。一七日段階で、米国防

そしてガルフへの出口であるバスマ

市へと進撃し、一九日段階で、バス

ラ市まで一一キロメートルの地点へ

と迫り、バグダッドへのミサイル攻撃もかけている。イラク領内への進

撃は、昨年のファオ半島への攻勢も

あるが、これだけ深く、しかもイラ

クは、これが「共同統治」実情（資料③）……9

87年を统一の年とし、闘争を躍進させよう！（資料④）……11

激動の中東ドキュメント（1987年1月3日～2月6日）……14

編集後記……24

目次

ICO第5回サミットと、軍事緊張高める米帝－イスラエル	1
ICO第5回サミットでのアサド大統領演説骨子（資料①）	6
第5回ICOサミット声明（25項目）主旨（資料②）	7
イスラエル－ヨルダンの西岸、ガザ「共同統治」実情（資料③）	9
87年を统一の年とし、闘争を躍進させよう！（資料④）	11
激動の中東ドキュメント（1987年1月3日～2月6日）	14
編集後記	24

し、シリアは、反「テロ」キャンペーンを口実とした米帝、欧帝による経済制裁、また、「キャンペーン戦争」をめぐってアラブ反動諸国からの援助停止のなかで、経済的には非常に困難な状況におかれていった（20号参照）。シリアのアサド政権が、ICOのなかでどのような立場をとるのか、これが今後の中東情勢の流れを規定する重要な要素としてあつたのである。こうした条件下で、サミット開催前には、シリアー・エジプトというアラブのなかで両極に立つ二つの政権の和解が噂されていた。

エジプトにとってのアラブ復帰はキャンプ・デービッド路線が、政治的・経済的に破綻している現状で、国内に蓄積された人民の怒りをおさえ、経済的手直しを計つていくためには、アラブ反動、とくにGCCの援助が必要であった。

シリアの側は、どうか？ 帝国主義による重包囲下での経済建て直しを計ついくためには、アラブ反動との関係改善が要求されていたのである。

PLO（アラファト派）は、中東和平国際会議へむけての独自性作りにむけ、レバノンにおける「キャンペーン戦争」でのPLOの正当性を、こ

のサミットで承認させていくこと、進行過程に入っているイスラエル・ヨルダンのPLOぬきの「パレスチナ問題の解決」に歯止めをかけることにあった。

会議 자체は、こうした反帝・親帝国家潮流の各々の狙いを、どのように反映して進んだであろうか？

まず、シリアは、アラブ反動の期待に反して、明確な反帝・反シオニズムのアラブ民族主義の立場を明らかにした。ムバラクを目の前にして反キャンプ・デービッドの立場を明確にうち出したのである（資料参考照）。

そして、サミット会期中に行われたアラブ・レベルのミニ・サミットに、シリアのアサド大統領、アルジエリアのベンジャヤード大統領、サウジアラビアのファハド国王、ヨルダンのフセイン国王、そしてクウェート元首が参加した。この会議ではレバノン問題が中心となり、レバノン大統領ジェマイエルとアサド大統領の和解工作が行われた。そこにおいて、レバノンを再び安定化へむけていく上でシリアの役割的重要性が確認されていった。

アラファト議長は、反対に、これ

いたレバノン大統領、ジェマイエルまで反シリアで共通の立場に立つた。PLO（アラファト派）が唯一かちからも会議を拒否され、ムバラク、フェセインとの会談を行ったのみであつた。PLOの孤立化が目立つた。PLO（アラファト派）が唯一かちえたものとしては、「パレスチナ・ヨルダン合同委員会」再開がフェイントとの間で確認されたことのみである。

パレスチナ問題では、昨年来のレバノンにおける「キャンプ戦争」が味方同士の悲惨な戦争として続けられており、一方では、PLOぬきの西岸、ガザ再編がヨルダン反動とイスラエルによって、「共同統治」、「生活の質の改善」として実体化している。この流れで、アラファト派は、パレスチナ問題、とりわけ、來たるべき中東和平国際会議での独自の位置を作り出すために、「キャンプ戦争」におけるパレスチナ側の正当性、レバノンにおける独自力量形成の承認をめざしていた。進行するPLOぬきの西岸、ガザ再編に対し何らかの形で、独自の立場と、物質基盤確保を必要としていたのであるしかし、「キャンプ戦争」は、レバノン内においても昨年一二月段階で、レバノン安定化の枠内に組み込

パレスチナ問題ということではなく、レバノン安定化へと、移行したことを見示す。したがって、アラファト派が意図したようなアラブ反動によるシリア押さえ込みにはならなかつたむしろシリアに対立していたジェマエルのシリアとの和解工作、そして、従来の反シリア、親アラファトのレバノン勢力も、シリアとの和解に動き始めるなど（サイダのスンニ派リーダーたち、トリボリの「トウファイド」、イスラム統一運動のリーダー等）、アラファト派のもろみは明らかに失敗している。それを再確認したのが、今サミットであったといえよう。反シリアで共同していたジェマイエルがアラファト議長との会見拒否に出たのは、その端的なあらわれである。こうして、アラファト派は、結局は、ヨルダンとの和解、そしてアンマン合意の方向へと、再び向かわざるを得ない構造となつていった。

し、シリアは、反一テロ」キャンペーンを口実とした米帝、欧帝による経済制裁、また、「キャンプ戦争」をめぐってアラブ反動諸国からの援助停止のなかで、経済的には非常に困難な状況におかれていた（20号参考照）。シリアのアサド政権が、ICOのなかでどのような立場をとるのか、これが今後の中東情勢の流れを規定する重要な要素としてあつたのである。こうした条件下で、サミット開催前には、シリア＝エジプトというアラブのなかで両極に立つ二つの政権の和解が噂されていた。

エジプトにとってのアラブ復帰はキャンプ・デービッド路線が、政治的・経済的に破綻している現状で、国内に蓄積された人民の怒りをおさえ、経済的手直しを計つていくためには、アラブ反動、とくにGCCの援助が必要であった。

シリアの側は、どうか？ 帝国主義による重包囲下での経済建て直しを計ついくためには、アラブ反動との関係改善が要求されていたのである。

PLO（アラファト派）は、中東和平国際会議へむけての独自性作りにむけ、レバノンにおける「キャンプ戦争」でのPLOの正当性を、こ

のサミットで承認させていくこと、進行過程に入っているイスラエル・ヨルダンのPLOぬきの「パレスチナ問題の解決」に歯止めをかけることにあった。

会議 자체は、こうした反帝・親帝国家潮流の各々の狙いを、どのように反映して進んだであろうか？

まず、シリアは、アラブ反動の期待に反して、明確な反帝・反シオニズムのアラブ民族主義の立場を明らかにした。ムバラクを目の前にして反キャンプ・デービッドの立場を明確にうち出したのである（資料参考照）。

そして、サミット会期中に行われたアラブ・レベルのミニ・サミットに、シリアのアサド大統領、アルジエリアのベンジャヤード大統領、サウジアラビアのファハド国王、ヨルダンのフセイン国王、そしてクウェート元首が参加した。この会議ではレバノン問題が中心となり、レバノン大統領ジェマイエルとアサド大統領の和解工作が行われた。そこにおいて、レバノンを再び安定化へむけていく上でシリアの役割的重要性が確認されていった。

アラファト議長は、反対に、これ

いたレバノン大統領、ジェマイエルまで反シリアで共通の立場に立つた。PLO（アラファト派）が唯一かちからも会議を拒否され、ムバラク、フェセインとの会談を行ったのみであつた。PLOの孤立化が目立つた。PLO（アラファト派）が唯一かちえたものとしては、「パレスチナ・ヨルダン合同委員会」再開がフェイントとの間で確認されたことのみである。

パレスチナ問題では、昨年来のレバノンにおける「キャンプ戦争」が味方同士の悲惨な戦争として続けられており、一方では、PLOぬきの西岸、ガザ再編がヨルダン反動とイスラエルによって、「共同統治」、「生活の質の改善」として実体化している。この流れで、アラファト派は、パレスチナ問題、とりわけ、來たるべき中東和平国際会議での独自の位置を作り出すために、「キャンプ戦争」におけるパレスチナ側の正当性、レバノンにおける独自力量形成の承認をめざしていた。進行するPLOぬきの西岸、ガザ再編に対し何らかの形で、独自の立場と、物質基盤確保を必要としていたのであるしかし、「キャンプ戦争」は、レバノン内においても昨年一二月段階で、レバノン安定化の枠内に組み込

パレスチナ問題ということではなく、レバノン安定化へと、移行したことを見示す。したがって、アラファト派が意図したようなアラブ反動によるシリア押さえ込みにはならなかつたむしろシリアに対立していたジェマエルのシリアとの和解工作、そして、従来の反シリア、親アラファトのレバノン勢力も、シリアとの和解に動き始めるなど（サイダのスンニ派リーダーたち、トリボリの「トウファイド」、イスラム統一運動のリーダー等）、アラファト派のもろみは明らかに失敗している。それを再確認したのが、今サミットであったといえよう。反シリアで共同していたジェマイエルがアラファト議長との会見拒否に出たのは、その端的なあらわれである。こうして、アラファト派は、結局は、ヨルダンとの和解、そしてアンマン合意の方向へと、再び向かわざるを得ない構造となつていった。

るということを示しているだろう。また、イラン軍のバスラ市への進撃をくいとめたとしても、イラン軍がイラク領内にいる限り、同政権は政治生命を失ってしまう。

一方、アラビア半島の地中海側においても、軍事緊張が高まっている。レバノンにおける人質問題を口実として、米海軍はケネディ、ニミツ等の空母率いる艦隊を集結させ、軍事攻撃をかける姿勢を示している。

とくわく、一月一三日、モハメド・ハマディがフランクフルト空港で逮捕されて以降、そうした軍事恫喝に屈せずに対決していく闘いが展開されているため、対峙、緊張が高まっているのである。ハマディ逮捕後、米帝が西独政府にハマディ引き渡しを要求したため、これを阻止する闘いとして、西独人が二名誘拐されたのである。さらに、二四日のペイルート大学の米人教授四名の誘拐は、米帝の軍事介入の危険性を高めた。レバノンで誘拐された外国人人質は、総計二五名になつた。

このアラビア半島の両側での緊張の高まりは、反戦勢力によってもござる。

—ICO（イスラム諸国会議） 第五回サミットの位置

うしたアラビア半島をめぐ

え、中東における自らの権益防衛をもくろむ米帝、とくに政権維持が困難になつたレーガン政権の延命のための軍事冒險主義の実行としてあつる。

— ICO（イスラム諸国会議）

第五回 サミットの位置

こうしたアラビア半島をめぐる緊迫した情勢下で二六日から開催されたICOサミットは、どのような方向をとっていくのか注目されていた。歴史的にはICO自身は、イスラム世界の連合体として、六九年に設立されたものである。六七年戦争でエルサレムを含む西岸（ガザ（パレスチナ）、ゴラン（シリア））がイスラエルに占領された問題を、イスラムレベルで解決すること（とくに、イスラムの聖地たるエルサレム問題は大きい）、イスラム諸国間の諸問題を解決するための調整機関としての役割を果たしている。現在の焦点は、イラシ－イラク戦争、レバノン問題、パレスチナ問題、アフガニスタン問題、そして経済問題である。この他にも、チャヤド問題、西サハラ問題等もあるが。アラブ世界が、反帝と親帝で分岐しつつも、反イスラ

様に、ICOもやはり、パレスチナ問題、エルサレム問題の態度を共通項としている。

クウェートで開催されたこのサミットには、八年ぶりにエジプト大統領も参加した（イスラエルとの単純和平協定によりICOからも資格停止処分をうけたものの、八二年のイスラエルのレバノン侵略に抗議して、イスラエルとの関係を冷却させた点を評価され、復帰したのである）。イラン、リビアは、イラン－イラク戦へのICOの態度、エジプト大統領参加抗議という各々の理由から、明確なボイコットを行った。イラク、モロッコ元首は、不参加であった。シリアの参加が注目されたいたが、シリアは会議に参加した。サウジアラビア国王は、クウェート到着時（二六日）のメッセージで、「イスラムのウンマ（イスラム宗教共同体）リーダーが、世界中のイスラムの熱望を実現すべく、率直に、善意をもって、真摯な決意に燃えつゝ、現在の諸問題を討議する場の意義を十分認識されておられるであろうことを疑わない」と、今回のサミットの位置づけを行っている。「イスラムの統一と團結作りという目標実現こそが、主導権を握る」

ろう。イスラム諸国の利益のために、アラビア半島の諸国が大同団結されるであろう」としている。

この会議にむけて、サウジアラビア率いるGCC諸国は、エジプト、シリアの参加にむけて動いていた。なぜなら、第一に、イラン＝イラク戦争がイラク側の危機状況のなかで、戦争がGCCまで拡大していく可能性が現実的な問題として出てきた。イランの攻勢をおさえこむ必要性があつたのである。このために、エジプトをアラブ世界に復帰させ、イランに対するアラブ反動の軍事力を動員していくことを狙つた。一方、イランと友好関係をもつシリアをアラブ側にひきもどし、イランを孤立させることを狙つての、シリア懐柔であった。

第二には、エジプト復帰の長期的意味として、反シオニストというアラブの総意。立場をあいまいにし、アラブ総体のイスラエルとの共存へ進むステップにするというものであつた。

そこから注目されたのが、シリアの参加の問題であつた。シリアは、これまで、こうした位置をもつ会議に参加せず、反動諸国の流れに対しても、

たは、現在のシリアとの関係にみられるように、その国家の政治展開に左右されることを甘受するかしない。PNSFからPFLPがアラファト派との再統一に動き出したように、シリアとの相対的独自の立場を現在の「政治」の枠内で進めようすれば、アラファト派に一步步みよることにしかならない。

が、それらに規定されることなく武装闘争によってパレスチナ革命を勝利させようとすれば、ファアタハ革命評議会（アブ・ニダル派）のように、地下組織を基本とする闘いによって國家「政治」の枠外から闘う展開が必要であろう。革命評議会派もまた民族主義としての政治的立場に立つ分、革命の指導部としての普遍性をもちにくいという限界は持っている。それでも、現在の情勢のなかで、パレスチナ革命が転換していくべき一つの方向を示している。

ソ連の動きに触れておけば、今回のICOサミットにむけ、二五日にサミットへのアピールを送っている。それは、アフガン問題での政治解決の立場を表明し、中東和平国際会議へむけて両国に働きかけるという立場を表明している。ソ連は平和政勢

三 中東の緊張を高

展開中だが、そこににおいてイスラム諸国との関係改善という立場を表明し、シリアの立場をバックアップするものとなっていた。

10

力の拡大に対する戦争としてある。これは、主要には、イラン、シリアを狙つたものであり、とくに、イランが大攻勢をかけるなかで行われた。米帝の同盟者イスラエルも、イラン

諸国との関係改善と立場表明し、シリアの立場をバックアップするものとなっていた。

三 中東の緊張を高める米帝・シオニストの動き

こうした平和、安定へむけた動きとは反対に、米帝は、ガルフ、地中海に艦隊を集結させ、レバノン、イランーイラク戦争への軍事介入の姿勢をとっている。中東情勢の緊張は、米帝のこうした行動によって高められているのである。

米帝は、レバノンの人質問題を口実に、そうした動きを正当化してきた。が、その本質は、人質救出云々にあるのではない。第一には、「伊朗・ゲート」暴露によつてレバノン政権誕生以来の危機に直面しているので、政権維持のために、ここで軍事的冒険を行つて、支持を回復する必要性である。次に、イランーイラク戦のイラン側優勢は、米帝が秘密交渉で売った兵器によるものが大きく、アラブ反動諸国の不信が高まっている。これに答えていく必要性がある。そして、戦略的には、米帝がL I W（「低水準戦争状態」）と規定する状態、すなわち反帝勢力の力を拡大に対する戦争としてある。これは、主要には、イラン、シリア産油国防衛は、米帝の中東支配にとって、死活問題なのである。

イスラエルはどうか？ イスラエルは、イランとの武器取引で関係はスラム原理主義国家の誕生を促すことを阻止しようとするだろう。とりわけ、イスラエルにとっての戦略的敵シリアとイランの友好関係をみると、そのイランが勝利することは、イスラエルにとっては直接的脅威をうけることを意味する。また、イスラエル自身がレバノン南部で再び大攻勢をかけることが噂されている。その根拠として、イスラエルの経済破綻が深まり、国民の不満がつのつてゐること、举国一致内閣内で労働党とリクードの矛盾が拡大していること（とりわけ、経済政策上の対立から、シャミル内閣の今年度予算案が未だに成立しえない）が挙げられてゐる。国民の目を外にむけ、不満をおさえるために、軍事冒険主義

月刊 中東レポート

み切ったのである。この機関は、エジプト－イスラエルの単独和平条約後のバグダッドにおけるアラブサミットで設立されたもので、対イスラエル前線国に対するアラブ各国の資金援助対象であった。八六年二月一九日に、フセインがアンマン合意破棄を宣言してから、同委員会は、機能停止になっていた。今回の再開はヨルダンによる一方的な西岸、ガザへの投資を許さないためのことを得たといふことになる。PLOがヨルダン経済協力を強めていくということはあっても、客観的には、アンマン合意の実体的実行過程に、PLOが入っていくことと言えよう。

まず、アラブ反動は、エジプトの

最大の焦点であったイラン＝イラク戦争問題においては、一方のイラクがサミット参加ボイコットを行っており、この問題でも、シリアがイランに対する鍵を握っていることに変化はない。アラブ反動としては、エジプトのアラブ復帰を実質的にかちとり、エジプトの巨大な軍事力をもって、イランとの対峙方向に進むであろう。また経済的にも、エジプトへの投資拡大によって、経済的結合を深めていくことになる。

同時に、レバノン問題においては、レバノンにおけるシリアの役割が合法性を得たことにより、安定化へ進むであろう。つまり、レバノンへのシリアのてこ入れが拡大していくことを意味する。シリアは、そのことによつて、レバノンにおけるシリアの影響力をさらに強め、さらには、アラブ反動からの援助をふやしていこうとしている。

レバノン自身では、ジェマイエルの対シリア和解の動き、キリスト教徒「伝統的指導部」（シャムーン、ヘロウ、フランジエ等歴代大統領を中心とする）がジェマイエルを支持し、シリアの下でのレバノン安定化

述したごとく、昨年来、イスラム左派の部分においても、これまで反シリアルア、親アラファトの立場に立つて、いたスンニ派民兵組織の指導者らもシリアルアとの和解に動いていた。しかし、キリスト教徒右派内では、L.F.のジャジャ等の新興勢力は、あくまでもカントン化方向をめざしており、ジエマイエルと対立している側面もある。

また、イスラム左派内では、アラファト派が依然として反シリアルアの立場をとつており、不安定な要素としてある。つまり、今回のICOサミットの結果として、シリアルアの位置が高まり、PLO(アラファト派)は相対的に地位を低下させている分、再びアラファト派等の反シリアルア潮流が反シリアルア行動を強化していく恐怕がある。パレスチナ勢力の大部分とアマルとの対立は、感情的しこりとなるべく残っていく分、「キャンプ戦争」としてくすぶり続けさせることになる。レバノン安定化の前途は、こうした要素に左右されているのであるが、シリアルアの力が、それらを一定小康させ得るのみである。

パレスチナ問題においては、アラファト派がヨルダンとの関係再開に

踏み出しており、それがアンマン合意の方向へと進むことになっている。アンマン合意は、ヨルダン側からの破棄が通告、宣言されたのに対し、アラファト派の側は明確には破棄していない。今回のサミットを機に、アンマン合意の方向に進み出しているということは、来たるべき中東和平国際会議におけるパレスチナ代表権をヨルダンに篡奪させないとを基本として、アラファト派がアラブ各国のパワーバランス政治のなかで作り出そうとしている闘いの現在的帰結である。

アラブ政治において PLO（アラファト派）が地位を低下させていることは、PNSF 等の反アラファト潮流にとってみても、アラファト派のみの地位低下にとどまらない。彼ら自身の地位低下の問題としてもあるということであるから、パレスチナ革命の前進にむけてどのようにこの状況を切り拓いていくのかということが大きく問われている。

アラブ国家政治の枠内でパレスチナ革命を考えようとすれば、アラファト派の政治展開にみられるように国家政治の中のパワーバランス内で綱渡り的展開を行いつつパレスチナの民族利益を確保していくのか、ま

諸国との関係改善という立場を表明し、シリアの立場をバックアップするものとなっていた。

三 中東の緊張を高める米帝・シオニストの動き

こうした平和、安定へむけた動きとは反対に、米帝は、ガルフ、地中海に艦隊を集結させ、レバノン、イラク戦争への軍事介入の姿勢をとっている。中東情勢の緊張は、米帝のこうした行動によって高められているのである。

米帝は、レバノンの人質問題を口実に、そうした動きを正当化してきた。が、その本質は、人質救出云々にあるのではない。第一には、「イラン・ゲート」暴露によつてレーガン政権誕生以来の危機に直面しているので、政権維持のために、ここで軍事的冒険を行つて、支持を回復する必要性である。次に、イラン・イラク戦のイラン側優勢は、米帝が秘密交渉で売った兵器によるものが大きい、アラブ反動諸国の不信が高まっている。これに答えていく必要性がある。そして、戦略的には、米帝がL I W（「低水準戦争状態」）と規定する状態、すなわち反帝勢力の

これは、主要には、イラン、シリアを狙つたものであり、とくに、伊朗が大攻勢をかけるなかで行われた。米帝の同盟者イスラエルも、イラク戦争への米帝の介入を予測している。米帝にとっては、ガルフ産油国防衛は、米帝の中東支配にとって、死活問題なのである。

イスラエルはどうか？ イスラエルは、イランとの武器取引で関係は持ちつつも、イラン革命の波及がイスラム原理主義国家の誕生を促すことを阻止しようとするだろう。とりわけ、イスラエルにとっての戦略的敵シリアとイランの友好関係をみると、そのイランが勝利することは、イスラエルにとっては直接的脅威をうけることを意味する。また、イスラエル自身がレバノン南部で再び大攻勢をかけることが噂されている。その根拠として、イスラエルの経済破綻が深まり、国民の不満がつのつてのこと（とりわけ、経済政策上の対立から、シャミル内閣の今年度予算案が未だに成立しない）が挙げられている。国民の目を外にむけ、不満をおさえるために、軍事冒険主義に

これは、主要には、イラン、シリアを狙つたものであり、とくに、イラク戦争への米帝の介入を予測している。米帝にとっては、ガルフ産油国防衛は、米帝の中東支配にとって、死活問題なのである。

イスラエルはどうか？ イスラエルは、イランとの武器取引で関係は持ちつつも、イラン革命の波及がイスラム原理主義国家の誕生を促すことを阻止しようとするだろう。とりわけ、イスラエルにとっての戦略的敵シリアとイランの友好関係をみると、そのイランが勝利することは、イスラエルにとっては直接的脅威をうけることを意味する。また、イスラエル自身がレバノン南部で再び大攻勢をかけることが噂されている。

米帝・シオニストは、中東の反帝党とリクードの矛盾が拡大していること（とりわけ、経済政策上の対立から、シャミル内閣の今年度予算案が未だに成立しない）が挙げられる。今後の中東情勢は、こうした帝国

・ キャンプの住民は、住んでいる家を買うことができなかつた。ところが、二つのキャンプに限り、買う権利を認めている。

C 「西岸開発五カ年計画」

1 金融

すでに八六年九月、カイローアンマン銀行支店開行にヨルダン、イスラエル間で合意し、ナブルスに同支店が開行している。同合意は、四八年來、(対イスラエル宣戦布告)初の公式文書である「覚え書き」として成立した。同支店の支店長は、一九年前と同じ人物。同行の株主は、ヨルダン政府エジプト政府ヨルダク・パレスチナ人個人 同行支店再開を、西岸、ガザ「文民行政」官シユロモ・ゴーレンは、次のように評価している。

「同支店開行は、ヨルダンとの関係を確立していくことになろうし、良好な政治的成果が得られるであろう。同支店は、主にヨルダンから西岸の諸団体への送金業務を取り扱う。ただし、同支店がテロリストへの送金ルートに利用されていることがわかれれば、即、閉鎖する」

つたら(平和条約との見返りとして)、弁償は、米国の肩にかかってくるだろう。

イスラエルは米国からの供与、借款に対し歳出報告義務がないので、前出の裏づけ資料を出すことはできない。が、移民、難民援助用に(エチオピアのユダヤ教徒や、その他のユダヤ人)渡された一五〇〇万ドルの使い道は、はつきりとわかっていない。エチオピアから連れてきたユダヤ教徒援助用には、二五〇万円計上されていたのに、ヘブロン近郊のキリヤト・アルバ入植に支出されたのだ。米国のA.I.D.(「国際開発援助」)しばしばC.I.Aの巣窟とされる——訳注)は六つの奉仕団体を通じて、西岸のパレスチナ人に資金を流してきている。毎年、五〇〇万ドルぐらい。が、それらの団体は、イスラエルの軍政当局の許可がおりなければ、何もできない。A.I.D.がそう規定しているからだ。イスラエル側としては、当然、あれこれと難くせつけて、パレスチナ人のためになるようなものを少しでも減らし、イスラエルの利益になるようにしてしまった。元エルサレム副市長のメロン・ベンベニスティが西岸のA.I.D.資金によるプロジェクトを完璧に調べ

上げた。彼の調査結果によると、七七年一八三年

- ・ 西岸の奉仕団体がA.I.D.から受けた供与総額は三六〇〇万ドル
- ・ イスラエルが認可した農業開発計画は三五・六%「トラクター、ブルドーザー等、地面を掘りおこすのに使う機械購入に関する計画のはほとんどは、不認可になっている」
- ・ ベンベニスティは、西岸のパレスチナ人||七ドル
- ・ 上下水道施設工事 八八・四%
- ・ 道路工事 八〇・六%
- ・ 米国務長官シユルツ氏は、「生活の質」向上のため、西岸のパレスチナ人経済を支援しているとおっしゃる。軍事費の浪費を重ね、まじめな経済措置もとらないというのに、米議会は、イスラエルのこうした乱費を放置しておいても良いのであるか?

歴史的捉え直し

現在は憂慮すべき、かつ複雑に入りこんだ情勢である。これを切り拓くには、さらなる戦闘的な任務展開が問われる。自然発生性への拝跪、副次的な闘い、分裂のための闘いは、人民は望んでいない。人民が望んでいるのは、戦略的基盤作りにむけた闘いである。

イスラエルの側は、米国納税者の負担が拡大していくのにおぶさって、貸金/物価凍結期間の三ヵ月間に八億ドル相当の紙幣を刷りまくっている。軍事費の浪費を重ね、まじめな経済措置もとらないというのに、米議会は、イスラエルのこうした乱費を放置しておいても良いのであるか?

1987年3月31日 第21号

2 交通

西岸外へ輸出されるルートとなる。西岸在住ヨルダン国會議員に對し、イスラエルは、本人の自家用車でのヨルダン行きにフリーパスを与えたとされる(信頼できるパレスチナ筋)。

また、西岸—ヨルダン・タクシーに特別通行証をイスラエルが発給するだろうとされている。

西岸外へ輸出されるルートとなる。西岸在住ヨルダン国會議員に對し、イスラエルは、本人の自家用車でのヨルダン行きにフリーパスを与えたとされる(信頼できるパレスチナ筋)。

また、西岸—ヨルダン・タクシーに特別通行証をイスラエルが発給するだろうとされている。

西岸外へ輸出されるルートとなる。西岸在住ヨルダン国會議員に對し、イスラエルは、本人の自家用車でのヨルダン行きにフリーパスを与えたとされる(信頼できるパレスチナ筋)。

また、西岸—ヨルダン・タクシーに特別通行証をイスラエルが発給するだろうとされている。

3 資金(総額一〇億ドル以上)

八六年八月段階で、ヨルダン首相は「ヨルダンは、同開発計画出資力量がないので、アラブ、イスラム諸政府、アラブの諸基金、欧、米、カナダ、日本からの融資をうけたい」と語っている。

同年九月、E.C.は、関税六〇%が(西岸、ガザ)に供与することを決定した。今までは、西岸、ガザは、「独立した地区」として認められていなかつた。

西岸開発計画で、イスラエルの法廷ボイコットを破つて資格停止処分をうけてきた弁護士の停止解除をヨルダン政府が行つていている。

D パレスチナ人閣僚の拡大

ヨルダンは、このほどの内閣改造で、パレスチナ人のダジャニを新内閣に任命。これは、パレスチナ人弁護士を代行して、パレスチナ人弁護士が行つた(一三〇万人)のうち、ヨルダン(一パレスチナ連邦制支持は、わずか1%である——編注)。

(同年二月、ヨルダンで同計画の「国際会議」が開催され、国連、アラブ諸団体、E.C.、米、日等の諸団体代表が参加した——編注)

西岸労組内親ヨルダン分子をアンマンへ送り、ヨルダン被占領地相と会議することが決定された。これは、西岸労組民族派と対抗し、包围していくための戦略作りを狙つたものである。

また、最近は、西岸、ガザ市町村に七〇人の技師を新しく任命していくことを、ヨルダン政府が決定。医師、看護婦も親ヨルダン派を任命。

こうして、パレスチナ—ヨルダン合同委員会の西岸、ガザへの送金機能をヨルダン政府が奪つた(ヨルダニ派の任命、賃金支払いという過程を通して、ヨルダンに従う公務員のみが働く構造を作つていくだろう——編注)。

また、弁護士界においても、イスラエルの法廷ボイコットを破つて資格停止処分をうけてきた弁護士の停止解除をヨルダン政府が行つていている。

ヨルダンは、このほどの内閣改造で、パレスチナ人のダジャニを新内閣に任命。これは、パレスチナ人弁護士を代行して、パレスチナ人弁護士が行つた(一三〇万人)のうち、ヨルダン(一パレスチナ連邦制支持は、わずか1%である——編注)。

は、次の二つの道を検討した。すな
わち、
一、長期武装闘争
二、非資本主義の道を通りつつ、暫
時、平和的に変革する。その過
程で、地域のブルジョアジーを
弱体化させていく。
パレスチナ・レベルでは、ファタ
ハの登場により、第一の道を進むこ
とにになった。ところが、今日、反帝
・反シオニズムの我々の闘争は、技
術躍進にどれほど影響をうけるこ
とになるだろうか？世界レベルに
おける反帝世界革命をどう進めるの
かという問題はあるが、それをどこ
にして、武闘理念の間接的修正要求
することは許されない。

反「テロ」キャンペーン

アラブの対イスラエルでの団結
対イスラエルということでは、パレスチナーアラブ同盟が中心課題である。しかし、アラブ対イスラエル紛争をどう勝利していくのかという民族的課題が忘れられ、一国、または地域レベルの問題の解決を求める仕方が主流になってきている。つまり、アラブの進歩的・民族的統一という課題は、このままでは危いといふことである。敵が強く、味方は分裂して防衛戦を強いられている。味方は、なぜ弱いのか？ 大衆の潜在力、可能性を最低限におとしめているからである。

武装闘争の復権を

この一五年間、全党派が武装闘争を主張してきた。が、革命的人民軍建設は、いっこうに進まない。まじめな良い戦士が個々にはいる。だが人民が武装闘争を選択するという段階には到っていない。

では、どうするべきなのだろうか？ 人民の力を、もつと武装闘争へ解き放つべきなのだ。武装闘争を組織し、奨励する目的をもつた大衆組織を作り、大衆が参加できる道を作

この一五年間、全

この一五年間、全党派が武装闘争を主張してきた。が、革命的人民軍建設は、いつこうに進まない。まじめな良い戦士が個々にはいる。だが人民が武装闘争を選択するという段階には到つていない。

では、どうするべきなのだろうか？ 人民の力を、もっとと武装闘争へ解き放つべきなのだ。武装闘争を組織し、奨励する目的をもつた大衆組織を作り、大衆が参加できる道を作るべきである。

ハレルヤ！革命の華麗と華美
この五〇年間、我々の目的は

、人民民主主義の確立
ある。そして、その指導勢力として
、民族統一戦線、革命人民軍の建
をめざしてきた。この戦略からみ
時、我々自身の今後の課題は、次
のように規定できるだろう。
、組織活動の変革
敵の情報戦にうかつこと。こ
のために、保安を組織の生命線
とする。

1

民族統一戦線指導部と個々の各党派指導部との有機的な関係規定。民族統一戦線形成へむけた民族主義・進歩勢力の大会。これは反米・反シオニズム・反反動を基準とする。

P N C 開催

パレスチナ革命の現到達段階、そこでの問題点、武装革命の未来の役割を規定する。

レバノン問題の解決の仕方

パレスチナ人民の防衛、そしてパレスチナーレバノン両大衆の

アラブの対イスラエルでの団結

アラブの対イスラエルでの団結
対イスラエルということでは、パレスチナーアラブ同盟が中心課題である。しかし、アラブ対イスラエル紛争をどう勝利していくのかという民族的課題が忘れられ、一国、または地域レベルの問題の解決を求める仕方が主流になってきている。つまり、アラブの進歩的・民族的統一という課題は、このままでは危いといふことである。敵が強く、味方は分裂して防衛戦を強いられている。味方は、なぜ弱いのか？ 大衆の潜在力、可能性を最低限におとしめていられるからである。

反動勢力は、

偏反動勢力は、革命と大衆を分断することに力を入れている。その結果として、各国の戦闘的革命が困難に直面している。しかし、パレスチナ革命には個別の独自条件がある。敵は、中東マーシャル・プランとして経済再編をかけ、人民を包囲しようとしているが、これでは、代案たりえない。人民と革命の関係は有機的なものである。たとえ、一時的に、人民と革命が疎遠になることがあるとも。なぜなら、広範な人民大衆が革命の主勢力である以上、時には人民大衆の指導性が革命勢力をしのいで前進することもある。

十一、論言

二、「言ったらやる」組織を作る。

三、日々の点検活動により、過ちを正す。これは、パレスチナ・アラブ任務を果たし得る組織を作れる。

四、各勢力、各組織への提案
△反シオニズム闘争総体強化へむけ一定レベルの統一を作ろう

我々は、パレスチナ革命の独自決定への介入（パレスチナ革命の戦闘性を損ねうという意図でなされる）に反対する。また、パレスチナ革命の決定を口実にした投降主義も許さない。

この統一にむけて、次のように提

成、選定、運動発展の計画化等、入念な配慮を行わねばならなかつた。経済、社会的な矛盾にもかかわらずこの地下活動の教訓を活用、発展させるべきであつた。

王ルタン敗北総括

P N L M 内部には政治・イデオロギー闘争が発生した。^①一九六七年の敗北後、アラブ反動政権は、大衆が及ぼす危険性を武装闘争の高揚のかげにみてとった。^②アル・カラメの勝利は、パレスチナ・レジスタンスの登場を告始めた。パレスチナ・レジスタンスは大衆を参加させ得たものの、大衆を組織することはできなかつた。不注意と保安の上げ底体制から、今日にまで及ぶ打撃を上げている。各派がメンバーを水増しし、不当な派閥闘争がおこり、革命をより公然としたものにしてしまつた。とうとう、革命を見世物（シヨー・ビジネス）のレベルにまで落としてしまつた。こうして、敵が簡単に潜入し得る構造を作つたのである。多くの派が誕生したこと自体は、否定的な面ばかりではなかつたが。

こうした我々の側の主体条件をみて、反動側は、自らの地位を再確立し、時を得て、帝国主義・シオニストと結託の上、パレスチナ革命に丁

(一九七〇年の)ヨルダンの敗北は、軍事的敗北というより、むしろ政治的な敗北である。路線逸脱指導部の後退が問題であった。一時期、反動政権の抑圧機構を大衆の力ががのいでいた事実からみても、それがわかる。武装革命の前進過程で、路線逸脱指導部が見世物をふやし、革命の戦闘的役割と目標を忘れていたのである。

パレスチナの民族の土地全面解放その手段としての武装闘争の役割を戦術目標に低め、倒れた先達の血を政治解決のための交渉カードに使おうという考え方があつた。

この理論は、七三年の十月戦争前に出てきたが、十月戦争後には、アラブ政権の軍事力量ぬきでイスラエルに対する軍事的勝利をかちとることはできないという宣伝になつた。武装革命が存在しているのに、路線逸脱指導部は、統轄力を失い、武装闘争に対して政治的役割を課するようになつたのである。

エジプトのサダトを使って、アラブ対イスラエル紛争を全面敵対から違う質へと転換させること。また、イスラエルとの共存を志向するヨルダンのフェインも、アラブ各国軍隊をまひさせ、向う四〇年間は一致してイスラエル攻撃にうって出ないよとに策動した。

パレスチナ・レジスタンスの反戦の任務は、武装革命の肯定面を復活させ、路線逸脱指導部、そして人民レベルにまでまんえんする墮落を整風することであった。つまり、統一した民族戦線の構築が要求された。つまり、戦闘機関を発展させ、その回りに政治機関を動員することである。この意味で、我々は、⁽³⁾ナタハ蜂起派を支持するものである。七四年來、我々が一貫して主張してきたのは、武装闘争による全土解放であるが、敵は、七八年、七九年の二年間、圧力をかけてきた。統一した民族戦線再建潮流が生まれたが

國際主義

パレスチナ革命の武装力、パラフチナ人の存在そのものを抹殺せんとする陰謀が進行している。これは、**④ダウド・ダウド**、そして、「**⑤フェイン・ビン・アリの帰依者**」と称するアマル内の分子が共謀し、レバノン人大衆とパレスチナ人大衆とに戦闘を強いているものである。が、我こそアリ・ビン・アビ・タラブの流れを汲む者であり、彼の示したキラル、原則に従い、価値の多様性を支持するのである。

⑥ 我々は、レバノンに我々の権威をうち立てたり、レバノンの土地占領を狙うが故にレバノンで闘っているのではない。シオニスト一帝国主義の一反動のファシスト攻撃、パレスチナ・レジスタンスを孤立化させんとする策動に対峙し、レバノン民族運動と進歩的民族運動とが、敵に対決している闘いを、共に担いたいのである。

- ・国会総選挙、二月二六日に決定。
- ・西岸から追放されたパレスチナ人、新聞編集長、アクラム・ハニエ氏、アルジェリア入り。
- 一月四日（日）
- ・レバノン
- ・南部レジスタンス
- ・イスラエルのヘリ部隊、南部数カ村を爆撃。イスラエルのパトロール部隊が待ち伏せ攻撃されたことへの報復。
- ・南ベイルート・南部の幹線道路封鎖。昨日のPSP軍事カーデルの暗殺に関連して。
- ・イスラエル
- ・内相ペレス、辞任。
- ・エジプト
- ・ムバラク、ヨルダン-PLO和解の鍵は、PLOが二四二を承認することとして、「和解」のアピール。
- ・エジプト-サウジアラビアの共同兵器開発討議のため、サウジ代表团が、エジプト正式訪問（ただし、サウジ側は、この訪問目的を否定）。
- 米帝
- ・一九八八年度連邦予算案、公表。総額一兆二四〇億ドル。国防費三一二〇億ドル。

- ・西岸から逃亡したパレスチナ人、アルジェリア入り。
- 一月五日（月）
- ・レバノン
- ・南部レジスタンス
- ・今朝、「SLA」拠点を爆破。四名、せん滅。これに対し、イスラエルのヘリが数カ村をハジビックラ一拠点として、爆撃。村民一四人、殺さる。
- ・「キャンプ戦」
- ・フアタハが北イエメン-イラク（またはサウジアラビア）-レバノンと、月三日月社（アラブの赤十字）を偽装して、チャーター機でコンドをレバノンに送りこもうとしていると、イスラエル放送。
- ・ICOサミットへ向けた動き
- ・リビアのジャルード氏、ジリア入境。イラン副外相もシリア入り。
- ・ICOライ開発生産計画
- ・米国防次官、イスラエル入り。F16、F15、F14、英ハリヤー改良型、F16ナラヴィの代案を米側は提示し、イスラエルのラヴィ生産計画を断念させようとしている。
- ペレス、シャミル、ラビン等との会談後、今月中に、調整し、最終結着つけたい意向。
- ・米カトリック大司教オコーナー、ペレスの自宅で会談（ローマ教皇）。

- ・エルサレムのイスラエル政府役所訪問を禁じている）。この後、ローマへ。
- ・経済ニシン藏相案に対し、各界から大反論。加えて、イスラエル中央銀行前総裁が退官とひきかえに月三万ドルの年金を受けとっている事が暴露され、社会問題化。
- ・西岸一帯で、昨夜、イスラエル軍との中衝突。
- ・「バーミュダ・コネクション」裁判ニューヨーク地裁の担当判事、「被告のうち一名が、八五年五月に、ペレスの事務所でカショギジ、イラン武器商人、当人が会議したと主張している。「イラン・ゲート」特別捜査官が、「バーミュダ・コネクション」も調査対象とするのか否かの方向をみてから、次の裁判日程を決める」と語る。
- ・西ベイルートでシリア兵二名殺され、一名重傷。この事件の後、PSPと親シリアSSNPのミリシアが市街戦。

- ・ガルフ反動
- ・サウジアラビアのフアハド国王、三月二四日頃訪英予定。英女王の招待。
- ・GCC外相会議。八日まで。
- ・東ベイルートで自由党前党首シャムーン（八六歳）、暗殺未遂攻撃受けのも、かすり傷とされる。
- ・日本国籍のコスモ・ジュピター号、

- 二、イスラエルとの共存、イスラエルとの紛争解決にむけた策動をうち破るために、パレスチナレベルの内紛の即時中止。
- 五、反帝によるアラブ・パレスチナ祖国解放にむけ、アラブ・レバールの同盟を発展させる。
- 口、UPNF（パレスチナ民族統一戦線）、UNF（民族統一戦線）形成にむけて、真摯な努力を行なう。
- 八、武装闘争発展にむけ、具体努力を行う。
- 二、反動、イスラエル、帝国主義と癒着した分子を肅清する。
- ホ、大衆組織内に蔓延する社会的損害、墮落を与えるとする企てと闘う。その企ての道具に対して、武装闘争発展のために、思想的、現実的基盤を作る。

- （①）六月戦争のこと
- （②）一九六八年三月二一日、ヨルダン領アル・カラメ村に侵略してきたイスラエル軍をパレスチナコマンドが迎撃し、追い払った（ヨルダン軍は早々に逃走したのであつた）。イスラエル軍の侵略を追い返した初めての闘い。この闘いを機に、パレスチナ武装勢力への信望が集まり、数年のうちに、ヨルダンでは二重権力状況とでも言うべき状態になつた。
- （③）アラブ・ムサ派等の反アラファト派をさす。
- （④）アマル南部軍司令官
- （⑤）フセイン・ビン・アリは、予言者モハンメドの娘婿アリの息子。アリが六六一年にイラクのクーファで殺され、正統カリフ時代が終わる。同年、ダマスカスを首都とするウマイア朝が成立し、サラセン帝国拡張の基礎を築く。
- （⑥）アブ・ニダル派の公式スポーツマンであるアブ・オマル同志によると、レバノンの「キヤンプ戦争」は、眞の民族主義者対エサ民族主義者の闘いである。なぜなら「眞の民族主義者は、イスラエルに対する闘いを第一にし、そのためアラブ民族主義を第一にする。したがつて、パレスチナ人であろうとレバノン人であろうとに関係なく、イスラエルに対する闘いを置いて、一国レベルの利益に拝跪する者は、えせ民族主義者なのである。この意味で、「キャンプ戦争」は、「レバノン人対パレスチナ人の闘い」と規定するのは過ちである。（これは、フアタハ革命評議会派「アブ・ニダル派」の英文機関誌「パレスチナ革命」第二号（八七一年一月号）-パレスチナ武装闘争開始二十二周年記念特別号）中の政治声明の抄訳。小見出しは、便宜上、中東レポート編集部がつけた）

- こうしたシーア派のスンニ派に対する正統権の挑戦でもある。サッダム・フセイン等、イラク指導部、指導階級にはスンニ派が多い。が、国民の六〇%はシーア派とされている。
- 激動の中東**
- （一月三日（土））
（一月六日（火））
- ・アブ・ニダル派の公式スポーツマンであるアブ・オマル同志によると、レバノンの「キヤンプ戦争」は、眞の民族主義者対エサ民族主義者の闘いである。なぜなら「眞の民族主義者は、イスラエルに対する闘いを第一にし、そのためアラブ民族主義を第一にする。したがつて、パレスチナ人であろうとレバノン人であろうとに関係なく、イスラエルに対する闘いを置いて、一国レベルの利益に拝跪する者は、えせ民族主義者なのである。この意味で、「キャンプ戦争」は、「レバノン人対パレスチナ人の闘い」と規定するのは過ちである。（これは、フアタハ革命評議会派「アブ・ニダル派」の英文機関誌「パレスチナ革命」第二号（八七一年一月号）-パレスチナ武装闘争開始二十二周年記念特別号）中の政治声明の抄訳。小見出しは、便宜上、中東レポート編集部がつけた）
- （一月三日（土））
（一月六日（火））
- ・ナジャハ大学、閉鎖される。新学期に備えた検問体制に反対する学生が、軍と対立している。ビル・ゼイト大も一ヶ月の閉鎖中だが、近く解除の見込み。
- ・「イラン・ゲート」とイスラエルの関連について、元外務次官キム・ナジャハ大学、閉鎖される。新学期に備えた検問体制に反対する学生が、軍と対立している。ビル・ゼイト大も一ヶ月の閉鎖中だが、近く解除の見込み。
- ・ナジャハ大学、閉鎖される。新学期に備えた検問体制に反対する学生が、軍と対立している。ビル・ゼイト大も一ヶ月の閉鎖中だが、近く解除の見込み。
- ・民主イエメン外相もダマスカスへ。アサド大統領と会談。
- ・クウェート外相、ダマスカスへ。アサド大統領と会談。
- ・ICOサミットへ向けた動き
- ・民主イエメン外相もダマスカスへ。アサド大統領と会談。
- ・ICOサミットへ向けた動き
- ・マーフィー、ヨルダン入り。『中東和平への道』再開の展望を把握するため』とマーフィー語る。フセイン国王は「現在、米国の信用は中東では失墜しつつあるので、完全に失墜してしまふ前に、何か手を打つほうが良いだろうと考えている」と曰く。
- ・ICOサミットへ向けた動き
- ・マーフィー、ヨルダン入り。『中東和平への道』再開の展望を把握するため』とマーフィー語る。フセイン国王は「現在、米国の信用は中東では失墜しつつあるので、完全に失墜してしまふ前に、何か手を打つほうが良いだろうと考えている」と曰く。
- ・ガルフ反動
- ・サウジアラビアのフアハド国王、三月二四日頃訪英予定。英女王の招待。
- ・GCC外相会議。八日まで。
- ・東ベイルートで自由党前党首シャムーン（八六歳）、暗殺未遂攻撃受けのも、かすり傷とされる。

- ・交渉のため、ペイルート入り。
イ、カラミ首相、声明発表。
〃シリアーレバノン政府関係促進は、安全・安定へ向けた肯定的な微候なり”
ロ、シーザーのシャムスディーン師、インタビュート、レバノンにおけるシリアの役割を高く評価。
ハ、サイダのムスタファ・サアド（PNDのリドラー）、アラファート派を非難し、”キャンプ外へのパレスチナ軍事力拡大を認めない。ダマスカス合意（八五年）の枠内で、すべての問題解決を”と訴える。
・西ベイルートの中央郵便局に爆弾。
重傷者二名。
- イスラエル
・シェケル、対ドル交換比を九・七五%切り下げ。これで、一ドル／一・六四シェケルに。また、政府補助金カットから、ミルク、チキン、パン等の基本食品が五・二〇%の値上げになる見込み。
- ガルフ戦
・イラク軍スポーツマンによると、イラクはイランの都市数カ所を爆撃。
- ・イランも、バグダッドをミサイル

米帝
・マーフィー、サウジのアド入り
（カイロから）。
スペイン
・ゴンザレス首相、本日から四日間
のカイロ訪問。
一月一三日（火）
レバノン
・南部レジスタンス
イスラエル機、アブ・ムサ派拠点
（ベカ一）と南部数カ村爆撃。レ
ジスタンス側が「SLA」拠点攻
撃し、三人をせん滅したことへの
報復。
人質問題
イ、OOOW（世界被抑圧者機構）、
イスラエルによる南部爆撃報復と
して、ユダヤ人一名処刑と発表。
口、西ベイルートのアパートから仏
人カメラマン、誘拐さる。
ガルフ戦争
・ガザのハーン・ニス村のモハム
メド・ダハラアン、ゲリラ活動容
疑でヨルダンへの追放確定。
イラク軍代表、モスクワ入り。地
対地長距離ミサイルを要請する見

			・ イラクのフセイン大統領、バスラ前線觀察。
			・ イラン軍、一一日夜から「カルバラーー五」攻勢第二段階に入ったと発表。
		一月一四日（水）	
		・ 人質問題	
			サウジ実業家一名、ペイルート空港から市内へ入る途中、誘拐される。
			I C O サミットへ向けた動き
			・ クウェートー東エルサレム姉妹都市化の約束する。I C O サミットで正式調印の見込み。
			・ エジプト石油相、O P E C の減産原油固定価格制（一バレル／一八ドル）の動きに連動し、原油生産縮減を発表。
	ガルフ戦争		
・ イランで反イラク政府勢力の大会。参加したのは、クルド民主党、シーア派組織、オンマ党（八二年結成）。			
・ 米軍筋によると、これまでのガルフ戦による両軍被害			
推定は	死者	負傷	
イラン	二三万五千人	四〇万人	
イラク	八〇万人	一七万人	

- ヨルダン
• フセインー・シラク、ヨルダン首相
—シラク空軍爆撃によるイラン民間
人被害は、死者六〇〇人、負傷者
一四〇〇人。
- 一月一五日（木）
レバノン
- U N I F I L
国連総長、U N I F I L配備駐留
六ヶ月延長提案。加えて、イスラ
エル軍がこの一年間に二〇〇回
もU N I F I L攻撃をかけたこと
を非難し、改めるよう要求。
- ポンド問題
シリヤ
レバノン中央銀行、海外でのレバ
ノン・ポンドだて通貨取引停止を
よびかける。
- 八七年度対中貿易議定書調印を公
表。さらに、経済、科学、技術協
力、水、電力の節約、繊維産業協
力も行うと発表。
反テロ・キャンペーン
• 西独公安、ペイルートからフラン

- ・米帝
- ・マーフィー、ヨルダンからイスラエルへペレス、シャミルとの会談予定。
- ソ連
- ・ソ中外務省近東、西アジア局長会談、北京で二日間の会期でスタート。中東問題について討議。
- アルジェリア
- ・外相を仏へ送り、チャド問題はOAU決議に沿い、対決ではなく当事者間の対話によって解決すべき。このために、全外国軍隊の撤退が必要」と提案。
- 一月九日（金）
レバノン
- ・南部レジスタンスのイスラエル攻撃に対し、イスラエルはサイダ郊を爆撃。今年、二回め。
- ・ファランジによるベイルート空港

- 表」会議を具体化するよう、フセイン国王に打診するものとされる。
- ・シャミル首相補佐官によると、近く西岸、ガザの市長との会議をシャミルが行い、「パレスチナ代表团」のようなものを作りたい意向直接交渉推進のため。
- ガルフ戦
- ・イラン、予告していた大攻勢「カルバラ一五」。シャツトラ・アラブ渡河し、イラク領に上陸、進攻（この日から、ガルフ戦、新しい局面に入る）。
- 米帝
- ・対エジプト軍事援助プログラムをつめるため、USAID局長が、三日間のエジプト訪問開始。
- エジプト
- ・一三日（火）からIMFとの交渉予定。借款の支払い一括りのベ支払い問題、新規ローン等。
- 一月一〇日（土）

- ・シーア派代表、国会議長、国防相、文相がレバノン情勢討議のため、会談。
米帝
- ・民族派各派が会合し、ベイルート空港および公共施設を攻撃しないことに合意す。
- ・マーフィー、イスラエル首脳との会談結果報告のため、アンマンへ。
G C C
- ・GCC石油相緊急会議で、O P E Cの新価格政策支持を確認。
- ・内相、イラク訪問。四日間予定。
エジプト
- ・スペイン
- ・ゴンザレス首相、アラブ連盟のクレイビ会長と会談(チュニスにて)。
中東和平国際会議支持、独自パレスチナ建国を含むパレスチナ人の民族的権利承認の必要性を強調し、アラブ一ヨーロッパの対話推進を訴える。

- イスラエル
 ・ 南部レバノン配備UNIFILの
 アイルランド軍哨所タンク砲撃（直
 撃）、アイルランド兵一名殺害に
 関し、事実を認める。ただし、「ゲ
 リラが同村にいることが確認され
 たので攻撃した」と発表。シャミル
 ル、アイルランド政府に正式謝罪
 ヨルダン
- フセイン、今日から訪欧。本日は
 パリ入り。ヨルダンの中東政策支
 持、「西岸開発五カ年計画」への
 協力とりつけのためとされる。
 ガルフ戦
- イラン、イラク両国が、イランに
 よるバグダッドへのミサイル（地
 対地）攻撃を確認。
- 一月一二日（月）
 レバノン
 ・ 南部レジスタンス
 イスラエル機、マグドウシェ村近
 辺を爆撃。

・ イラクのフセイン大統領	・ 前線視察。
・ イラン軍、一日夜から「五一」攻勢第二段階発表。	
一月四日(水)	・ 人質問題
	サウジ実業家一名、ベ
	港から市内へ入る途中
	ICCOサミットへ向けた
	・ クウェート東エルサ
	市化の約束する。ICC
	で正式調印の見込み。
	・ エジプト石油相、OPEC
	原油固定価格制(一バレ
	八ドル)の動きに連動
	産縮減を発表。
カルフ戦争	・ イランで反イラク政府
	参加したのは、クルド
	ニア派組織、オンマ党
成)。	
・ 米軍筋によると、これ	
フ戦による両軍被害	
推定は	死者
イラン	二三万五千人
イラク	八〇万人

領、バスラ	ら「カルバ に入ったと
イルート空 、誘拐さる、 動き	レム姉妹都 〇サミット
E C の減産 一レル／一 し、原油生	までのガル 負傷
勢力の大会 民主党、シ (八二年結	四〇万人 一七万人

- ヨルダン人被害
- 一四〇
- 一月十五日 中東にいる。「P」まだ道
- レバノンシリヤ
- UNI国連紛六力日エル軍もUNIを非難
- ポンドレバノンノン・ よびシリア
- 八七年表。さ
- 力、水力も行
- 反テロ、西独八

国際会議
LOが以前
道はある」
における信
五日（木）
F I L
総長、U N
題
ト問題
軍がこの二
難し、改め
ノン中央銀
・ボンドだ
かける。
年度対中貿
さらに、経
小、電力の
行うと発表
・キャンペ
公安、ペイ

ク、ヨルダ、フセイン、で和平を」の約束を定と語る。による二月九日六〇〇人、易議定書調行、海外で一年間に二攻撃をかけるよう要求。IFIL。加えて、一年間に二攻撃をかけるよう要求。ルートから。一
ノ

クフルト空港入りしたレバノン人青年一名（モハムマド・ハマーディ）を、八五年六月のTWA機乗つ取り犯容疑、同時期のフランクフルト空港出国ホール爆破容疑で、一三日（火）逮捕」と発表（以後、米帝一西独のハマーディ引き渡し交渉、革命勢力側のハマーディ釈放要求作戦が、レバノン情勢に反映）。

経中央統計局発表によると、八六年度インフレ率は、一九・七%（八五年度は一八五%、八四年度は四四・九%）。

石油相、カイロ訪問。

ヨルダン、サウジアラビア、

フェイイン国王、本日から三日間伊訪問。

レバノン、南部レジスタンス、「セキュリティ・ゾーン」内の「SLA」拠点をレジスタンスが攻撃。「SLA」はレジスタンス側三名の戦死を伝える。一方、レジスタンスは六〇名の部隊でスール北東の「SLA」拠点攻撃し、占拠す。直後に、イスラエル軍用車に、投石。

ロ、ラマッラでも、パレスチナ・キャンプ近くを通ったイスラエル人に投石。

ハ、軍は、ナブルスのナジャハ大学閉鎖を二二日まで延長すると発表。ICOサミットへむけた動き

クウェートで、油田、石油積出し港等三カ所が同時に多発爆弾、火災。また本日からクウェート航空、ベイルート便、ICOサミット終了まで中止。

クウェート紙によると、ムバラク、「アラブが共同合意に達せなかつたことが、アラブを弱めた」と、パレスチナ問題未解決の中心がアラブの不團結にありと指摘。ヨルダン紙、一七日のエルサレムの事件をとりあげ、パレスチナ人が入植村増設を許さないレジスタンスを担っていること、イスラエル占領下のパレスチナ人の生活は悲惨の極みであることを強調。

サウジアラビア

ナセル石油相、モスクワ着。二二日まで、OPEC価格への共同歩調をソ連に要請する。

エジプト

アル・アハラム紙初の北米版配給

開始（五千部、一部一ドル）。

一月二〇日（火）

レバノン、南部レジスタンス、「SLA」のラハド、被占領工場、スール近くで、UNIFILのフィジー軍パトロール隊、「SLA」から砲撃される。A」から襲撃され。ハ、レジスタンス側は、「SLA」ポストを襲撃、イスラエルのパトロール隊も襲撃す。

人質問題

イ、ウェイト、ホテルへ帰らず、誘拐されたという噂、流れる。以後、行方不明。

ヨルダン紙、昨日のムバラク発表に反論。

シリアーレバノン首脳会談の見込み薄説が流れ、レバノン・ポンド八七・二五（昨日は、八二・七五）まで下る。

イスラエル

今日から食糧品の一部、値上げ（政府補助カットのため）。

家コルデス氏、ベイルートへむかう途中で誘拐さる。

西獨政府、西獨市民に対し、レバノンへの旅行中止、在西ベイルート西獨市民にも東ベイルートへ移るようアピールす。

空港問題

ベイルート空港利用の乗客の安全のため、シリア軍が空港配備する。イスラエル

ガルフ戦

ロイター電、イランによるバグダッドのミサイル被弾を確認。

米側分析では、一二月二四日からのバスラ攻防戦によるイラン軍側被害は死者、負傷者とも各二万、イラク軍側死者は一万。

モロッコ

対テロ、対組織犯罪、対麻薬に関し、伊との協力合意調印を、モロッコ内相が発表。

一月一七日（土）

レバノン、南部レジスタンスの高揚、UNIFILの規制により、「SLA」が二五〇〇から一八〇〇へと三五%も勢力後退したとされる（イスラエル放送）。

ペイルート空港について西獨実業

人質問題

エルサレムで記者会見し、①攻撃が激しく「SLA」の部隊が減った。しかし、近く増援できる見込み。

②「セキュリティ・ゾーン」内のパレスチナ、レバノン人捕虜に、国際赤十字の面会を許さない、と語る。

スール近くで、UNIFILのフィジー軍パトロール隊、「SLA」から砲撃される。

ハ、レジスタンス側は、「SLA」は①アラブ被占領地におけるイスラエルの入植村問題②ヨルダンICOサミットへむけた動き

クウェート紙によると、ヨルダンは①アラブ被占領地におけるイスラエルの入植村問題②ヨルダンICOサミットへむけた動き

一パレスチナ合同委員会問題③被占領西岸、その他におけるイスラエル聖所へのイスラエルの攻撃に関する文書提出を準備中。

ヨルダン紙、昨日のムバラク発表に反論。

「国連監督下の交渉に応じなかつたのはイスラエルの側。その方式外のやり方をしたエジプトは対米負債に呻吟し、イスラエルがもちこむ麻薬で人民は苦しんでいる。中東和平過程を妨害しているのはあたかもアラブの側といふようないふことを言うのは、アラブの利益に非ず」

ICOサミット

昨日のクウェートの事件につき、ペイルートの新聞に、「予言者モハメド部隊革命組織（在クウェート）が、責任を表明。初めて「ラフィデン運動」（イラクのハジビッラー前衛）という組織も、サミット中止を要求闘争。

日本中東協力センター所長、バーレーン訪問中。八五年度の日本のバーレーン輸出約二億ドル、輸入約三億ドルと公表す。

一月一九日（月）

レバノン、南部レジスタンス側、「SLA」と交戦。

米帝

第六艦隊司令官ケンダル・モラン・ヴィル、軍事協力についてチュニジア国防相と協議（チュニスにて）。

一月一八日（日）

レバノン、サイダのムスタファ・サアド氏、ベイルート南部で襲撃されるも、無事。ガードのうち二名が負傷した。

西岸の反イスラエル・レジスタンス

イ、レジスタンス側、「SLA」と交戦。

日帝

日本中東協力センター所長、バーレーン訪問中。八五年度の日本のバーレーン輸出約二億ドル、輸入約三億ドルと公表す。

一月一九日（月）

レバノン、南部レジスタンス側、「SLA」と交戦。

米帝

第六艦隊司令官ケンダル・モラン・ヴィル、軍事協力についてチュニジア国防相と協議（チュニスにて）。

一月一八日（日）

レバノン、サイダのムスタファ・サアド氏、ベイルート南部で襲撃されるも、無事。ガードのうち二名が負傷した。

西岸の反イスラエル・レジスタンス

イ、ナブルス近くのバラタ・キャンドルダンとイスラエルは、ネゲヴ沙漠での共同経済計画に合意したこと。ただし、イスラエル外務省、このニュースを否定。

公立病院事務、難役労働者一人万五千人、裁判所の職場復帰令（三日間、賃上げ要求ストしている）無視。

ICOサミットへむけた動き入り。アサド大統領と会見。

ダム副大統領と会見。

レバノン内相、シリア訪問。カツリビアのジャルード少佐、シリア

・レバノン共産党書記長、シリア訪問。アサド大統領と会見。

・レバノン内相、シリア訪問。

・レバノン共産党書記長、シリア訪問。アサド大統領と会見。

・昨日のクウェートの火事につき、レバノン紙上に、新しい二組織が責任表明。サミット中止要求闘争。

- ・ クウェートの新聞とのインタヴュードで、カダフィ大佐、「イラクとも互角であり、どちらかが勝つ」という条件がない。そして長期化はイスラエルを利するのみなので、アルジエリアーインドネシアーナイジエリア三国でイスラム軍を編成し、緩衝軍として入ることが望ましい」と語る。
- ・ イスラエル
- ・ 一月一六日に刺されて入院中のイスラエル人、本日退院す。
- ・ イスラエル－ハンガリーの経済關係改善の動きありとキャンペーン（八六年一一月、ウルグアイで、シャロン商工相がハンガリー貿易関係者と会見したこと）。

イ、ベイルートで、二人の外国人拉致される。行方不明。

ロ、西独大使館閉鎖。一五〇人の西独市民、昨夜のうちに東ベイルートへ疎開したこと。

ハ、ウェイト行方不明、六日め。

ニ、レーغان、「レバノンにおける外国人誘拐戦は、文明世界への挑戦であり、これには妥協できない」と強硬発言。

・「キャンプ戦争」

アラファトによると、「①キャンプ戦争で殺されたパレスチナ人は四〇〇〇人。家を失ったのは八万人 ②南部スール区の四パレスチナ・キャンプは影も形もなくなつ

- 焦点は、最近設立された欧－イスラエル商工会議所がEC－イスラエル経済協力完全実施への前段であるとし、これへの対抗措置をどうするかという問題になろう。
- 西岸、ガザの反イスラエル・レジスタンス
- ガザのダハラン氏（二六歳）、今日、ネゲヴ砂漠からヨルダン領へ追放さる（以後、ガザのレジスタンス、高揚）。
- ニシン蔵相、ヒスタドルート、イスラエル企業家連合との物価／賃金凍結（一年間）調印了を発表。八八年三月まで、交通費を除き、物価／賃金凍結。賃金労働者は、イスラエル

- ・ めてのイスラエル公式訪問。
・ ラヴィ 生産中止交渉のため、マクダネル・ダグラス社代表、イスラエル入り。
- エジプト
- ・ 一月二〇日、東方系ユダヤ人指導者生誕祭に、モロッコ、米、仏、カナダ、イスラエルから一万人のユダヤ人がカイロ近郊の村で集会した事実を、野党紙が暴露。
- サウジアラビア
- ・ ナゼル 石油相、英エネルギー相と会談。
- ・ 石油収入減補てんとして、八八年から金商業生産を行うと発表。一〇〇〇年前の金山を、現在一億一〇〇〇万ドルかけて近代化中。

月二十五日(日)

1987年3月31日 第21号 月刊 中東レポート

ソ連
・プラウダ紙、イスラエルの対シリ
ア攻撃の野望に警告。

一月二三日（木）

レバノン

・南部レジスタンス

イスラエルに砲撃され殺されたU
N I F I Lアイルランド兵の妻、
イスラエルからの五万ドルの補償
金を拒否。

・ドルーズ区（アラムーン。ペイル
ート-ダマスカス街道で、レバノ
ン民族派ルート）で、シリア軍情
報将校一名殺され、兵二名負傷。
誰がやったか不明。

ヨルダン

・元ヘブロン市長カワスマ暗殺（八

- ・ クとは同席できない」として、参 加ボイコット声明。
- ・ イランも、サミットのボイコット を決定。
- ・ シリアは、参加を決定。
- ・ シヤミル首相、ペレス発言を否定 (『ヨルダン＝エジプト－イスラエル三国による中東和平会議実質合意が挙国一致内閣としてある』)。
- ・ ペレス外相、ロンドン入り。中東「和平」工作に、英帝をまきこむ工作。
- ・ ペレス外相、ロンドン入り。中東「和平」工作に、英帝をまきこむ工作。

- ICOサミットへむけた動き
- アルジエリア大統領、シリアから
帰国。
- ヨルダン
- オーストラリア首相、ヨルダン入り
り。三日間の公式訪問。
- フセイン国王、訪欧から帰国す。
- イスラエル
- 対イスラエル・レジスタンス
イスラエル軍スポーツマンによ
ると、八六年度のパレスチナ・コ
マンドによる闘争は五三六件。う
ち四八年ライン内は一七四件、西
岸、ガザ地区は、三六二件。
- テレアビズ朱式取引所所長、ノル

- 人質問題
　　口、ベイルート大学から四人の米国人教授、誘拐さる。
　　ロ、米帝のガルフ戦介入中止を要求し、米人人質一名処刑すると、恫喝あり。
　　ICOサミットへむけた動き
　　・ クウェートで、爆弾。数日前の爆弾、火災によるサミット阻止闘争と同じ。予言者モハムメド部隊が責任表明。
- G C C
　　銀行総裁、大蔵省)、アブ・ダビで本日から二日間の会議。G C C としての統一通貨(ガルフ・ディナール)作りと、SDR、または長ドレの、ザルニ立脚するのかも

- U A E、スー丹にボーアイング
を二機、カンパ。

- 四年）犯人四人に死刑、六人に終身刑判決下す（軍事法廷判決をヨルダン政府が了承）。
- アラファトは側近のアブ・ジハド

の伊国防相と会談。同首相曰く「ヨルダン－イスラエルの協力で、テロリズムをへらせた」

ミ・リイ・シユ・ラエル銀行頭取に任
命さる。

イ、「パレスチナ解放イスラム聖戦」組織、二四日に誘拐した米人四名の生命と交換に、四〇〇人のレバノン人政治犯の釈放を要求。ロ、米国ニュース・世界リポート誌とのインタビューで、シュルツ、強硬説を出す。

「この際テロリストに思い知らせるために、軍事解決も考慮すべきイランとの秘密交渉が暴露され、誘拐作戦を誘発しているが」また、マスコミが人質問題を大きく扱いすぎており、むしろテロリ

- 二月二日（月）
　　テ
　　二月二日（月）
　　レバノン
- 人質問題
　　ウエイト問題
- a、英國教会は、“誘拐されたとい
　　う確証なし”
- b、ベリは、「米人五人、仏人二
　　人を捕えていた組織が、ウエ
　　イトも捕えていた。この組織
　　と交渉中」と語る（イスラエル放送）。
- イスラム聖戦機構が、米帝の軍事

あり。同バスのルートは、数台で集団移動することになった。ガザで、三人の高校生逮捕さる。ラビン戦争相、人質問題に言及。イスラエルが欧米人人質釈放銀行をつとめるわけにはいかぬ。四〇〇人のテロリスト釈放要求には応じない”

リクード連合の元蔵相は、ペレス外相の八五年五月のガリリー作戦への妥協を、改めて非難。“あの譲歩は、テロリストの要求に応じるという悪しき前例を作った”(ガ

- 人質問題
　　イラン、ウエイトを捕えているのは、イラン革命防衛隊（イラン國軍に匹敵する規模。モンタゼリ師指揮下）という説を、否定。
- 経済
　　国会筋によると、八七年度国家予算赤字見込みは一億三二〇〇万ドル見込みへ八六年度の二倍。ただし八六年度は、政府最終案がまとまらず、予算自体不成立）。

・イラン、米人記者をスペイン容疑で逮捕。
・ムバラク、UAE訪問終え、オマーンへ。UAE大統領へあてたメッセージで「アラブ史上、きわめて危険な状況にガルフの兄弟達が直面している現在、エジプトは全力量をかけてアラブの兄弟の側に立つことを、ここに再確認したい」（八五年一月、UAE油田を国籍不明機が爆撃した後も、ムバракは、すかさず「UAE支持」のメッセージを送った）。

- ・ 空港問題
- ・ M E A社長、M E A運行一時的停止声明。これは、非公式な空港閉鎖。
- ・ 領内レジスタンス
- ・ イスラエル

ここ数年間安全とされてきたハイファーエルサレム定期バス便が、爆破され、数人負傷。ダマスカスで、アブ・ムサ派が責任表明。アラブ・ボイコット委員会、声明発表。

月二七日（火）
ICOサミット
・アサド大統領、演説。反帝・反イ
スラエルの立場を強くうち出す。
ソ連のアフガニスタン政策を支持
(撤兵計画等、平和の道として)。
ただし、ムバラクとの秘密会談說
も流れる。

- ・ レバノン 南部レジスタンス U N I F I L のアイルランド部隊 宿舎にリモコンの爆弾爆発。六人が負傷。
- ・ ジェマイエルの二月四日のヨルダノ訪問予定、公表。
- ・ 人質問題
- ・ ベイルート大学で、四人の米人教 授誘拐抗議デモ。
- ・ 米帝、レバノン在住米国市民に対

- ・ フィリピン海域から、空母キティホークがアラビア海北部にむかって動いている。
- ・ シュルツ、南アANCのタンボ氏と会見。
- ・ 東ベイルートで、爆弾二件。
- ・ 経済レバノン
- ・ 本日から賃金四〇%値上げ。ただし、労働総同盟は、八六年度の消

